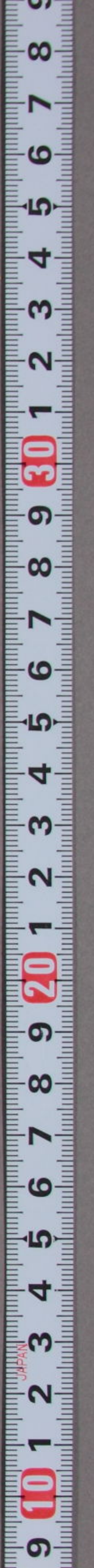


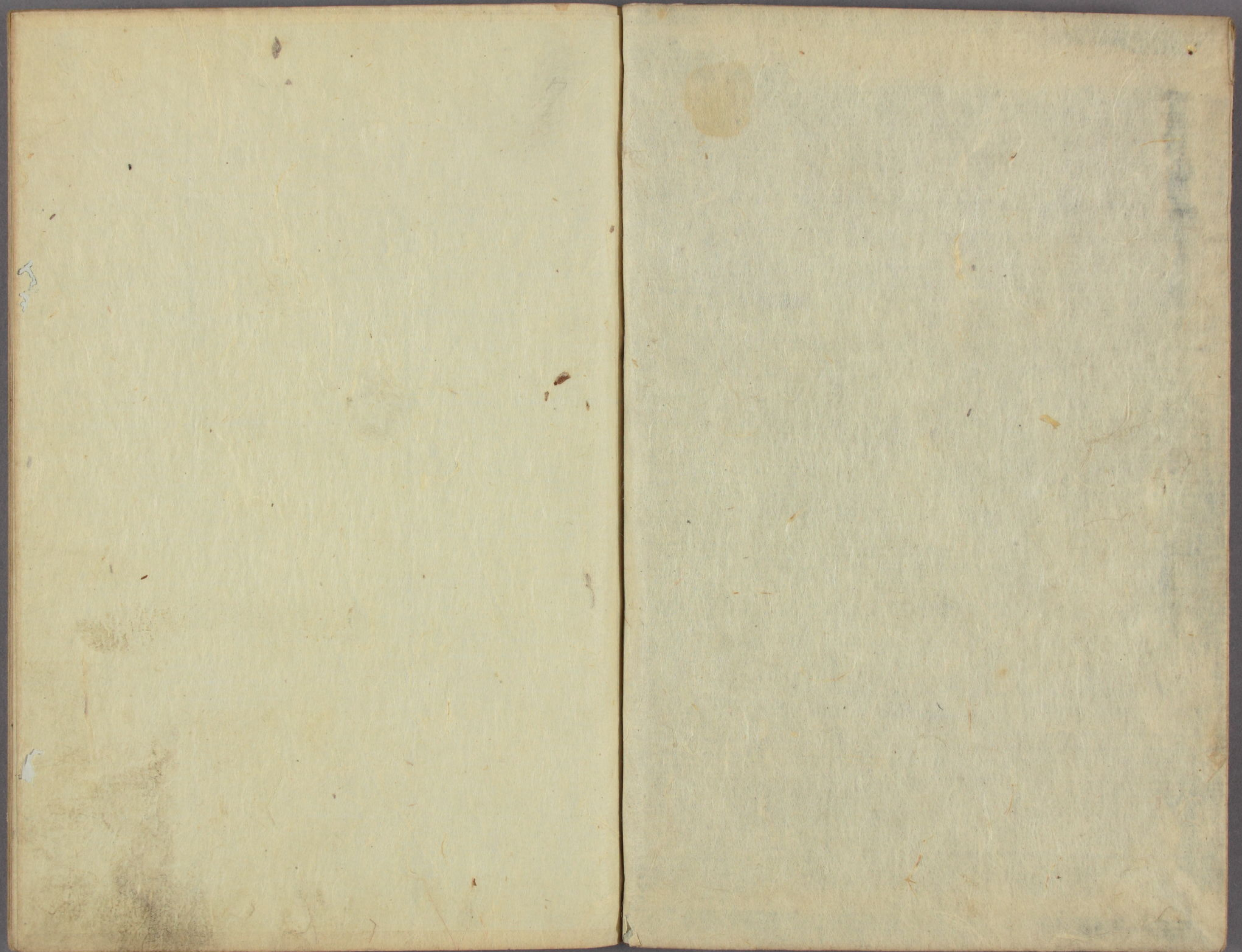
新板
於佐那
繪入

源氏物語

七

伊地知文庫
文庫20
397
4





Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the right page of the open book. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the left page of the open book. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.



結

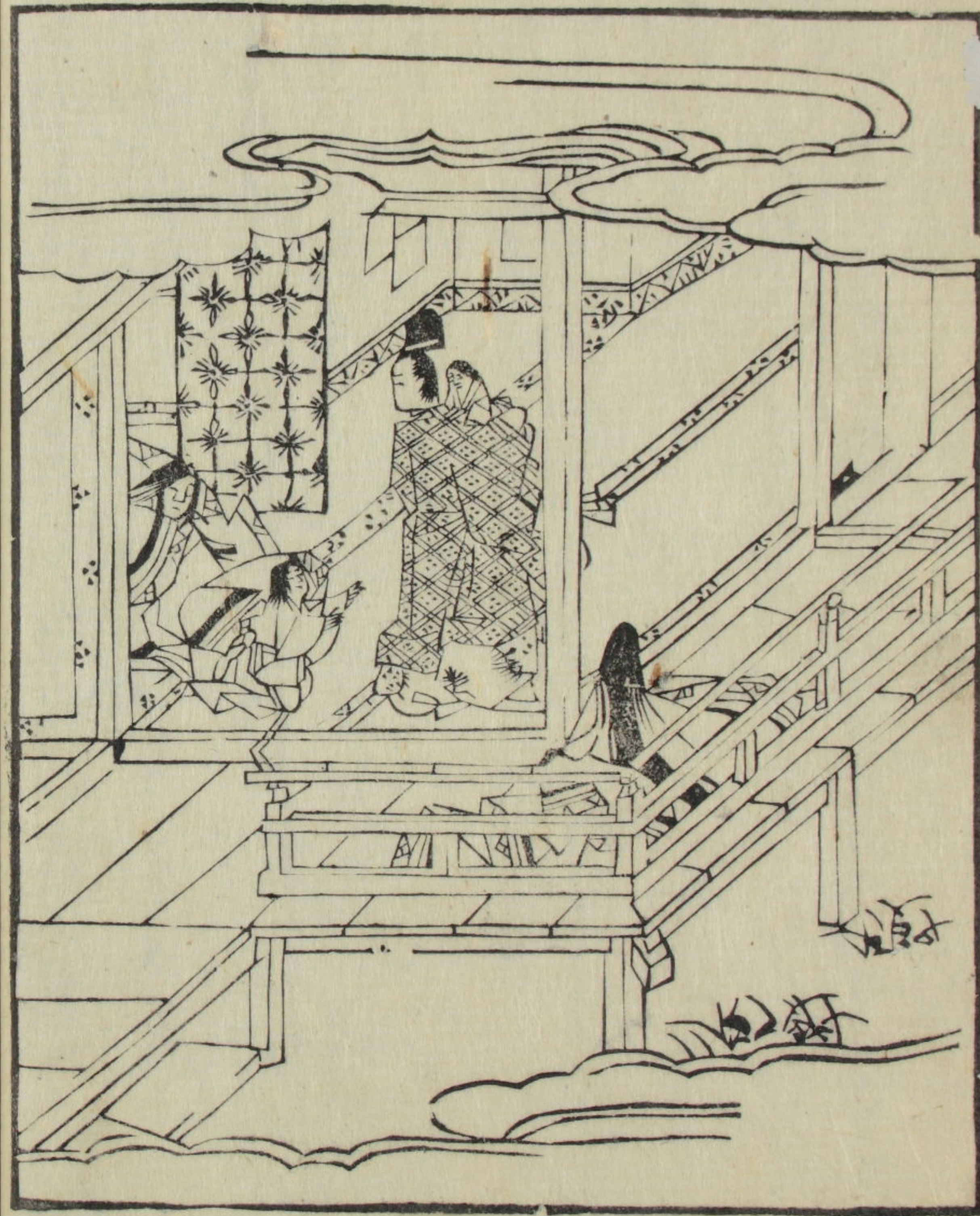
うわらふにちかきあひしき所乃
 こゝすけしうさゝのありわりの

秋のゆりの物あられさふ大お一糸のさか
 めうううわめれしひらきさし一ねと
 すこひきおんきものひきよしとせお
 女二のきおんちお

三

おらおれしあおんしはらさ
 人うららららあしきおん
 うらおのあられらうらまきわげど
 おしうらうらえやきりける

かきうわしおんさへてなれうらあられ



丁巳 陽暦十月 夕暮 亦也

まあるらるすれ花のいろりに入返廿三の姫文に
おふりらぬしねんおくれゆらうに錦
らるるいびけのまんうがけてまらうの
ああまをけやまらうのくらやうたん
はらうけうあまの種いおくれがせう
係 たらうあまのこらうらまらう
あれわういけあま

十三
魚うしなうらうらうの中が整うてと
あうらうやすまうらう

八月廿四日 卯 夕暮 亦也

常若くは大なる人々もあつては
まづ初めに冷泉院より出たなり

や ちのどろりたるはるるに
まの目下れせぬおのれは

は 月影のあつたるに
わづらひしれおのれは

わづらひしれおのれは
わづらひしれおのれは

ウノ書 陽の書

ウノ書はたおこまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

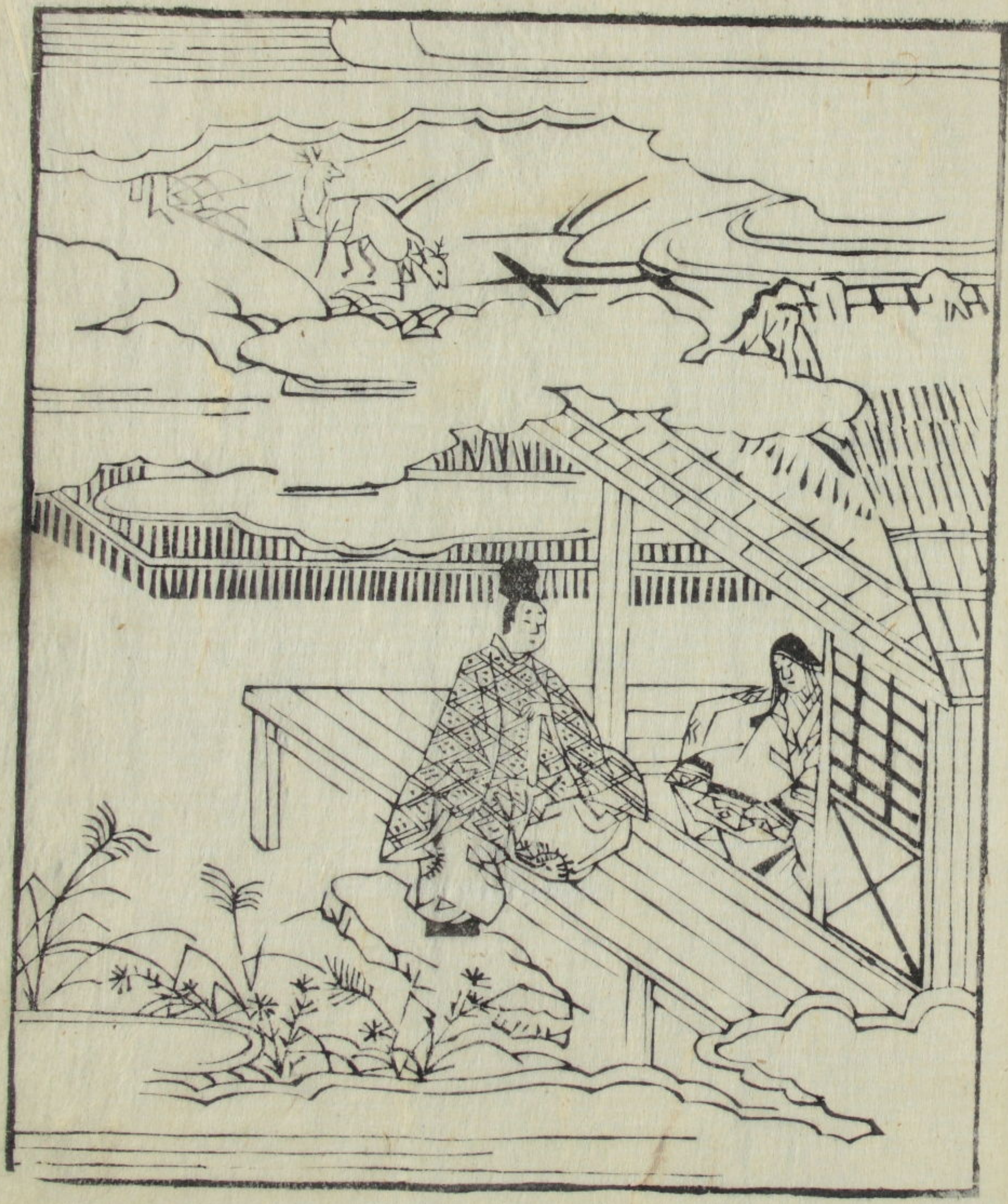
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

あまのつちも新造の庭にまらしく
 八雲のつちも新造の庭にまらしく
 廿二
 玉のつちも新造の庭にまらしく
 かのつちも新造の庭にまらしく
 ちかづきのつちも新造の庭にまらしく
 まれまのつちも新造の庭にまらしく
 ひろのつちも新造の庭にまらしく
 ちかづきのつちも新造の庭にまらしく
 まれまのつちも新造の庭にまらしく
 ひろのつちも新造の庭にまらしく

あまのつちも新造の庭にまらしく
 ちかづきのつちも新造の庭にまらしく
 まれまのつちも新造の庭にまらしく
 ひろのつちも新造の庭にまらしく
 ちかづきのつちも新造の庭にまらしく
 まれまのつちも新造の庭にまらしく
 ひろのつちも新造の庭にまらしく
 ちかづきのつちも新造の庭にまらしく
 まれまのつちも新造の庭にまらしく
 ひろのつちも新造の庭にまらしく
 ちかづきのつちも新造の庭にまらしく
 まれまのつちも新造の庭にまらしく
 ひろのつちも新造の庭にまらしく

しわざのほやそなたも又うすまのいふれとな
 けさしうまうちあせりいれおののちの
 ゆえありちおえわうおくおののちのちん
 のうれまといふまうまうまうたにたい
 せんしほくちおえくせうしういんま
 うほくたにううてもゆらんせうたおあ
 ちれさかたのまをれおあせりわげうて
 あせれまといふううううううううう
 むらやあしううううううううう
 九月のあまういおあううううううう
 てあうううううううううううう



ひさびさのこころ花の里へ

あふあふまにけりあふそなたのまゝ

せしあふじきよ中乃ちらぎうら

あふ
むすいさくあふたはるどちさ乃

のうりまくあふこのうりなりとを

なあふういあふあふまをいあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

と橋といはれけりく群あをまあふあ

けりあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあ

中よ

中よ

あ

中よ

大お

かゝるおの君はほくらんじつりて
花さくらんれいゆきほらんじつ

ひぐさのさきいしゆん

ついでにやういふことなれり
まじりてしるしに
あつたはつた
しるしに
七つ乃あやむれに
うらむの海いあそ
それははつた
あつた

深

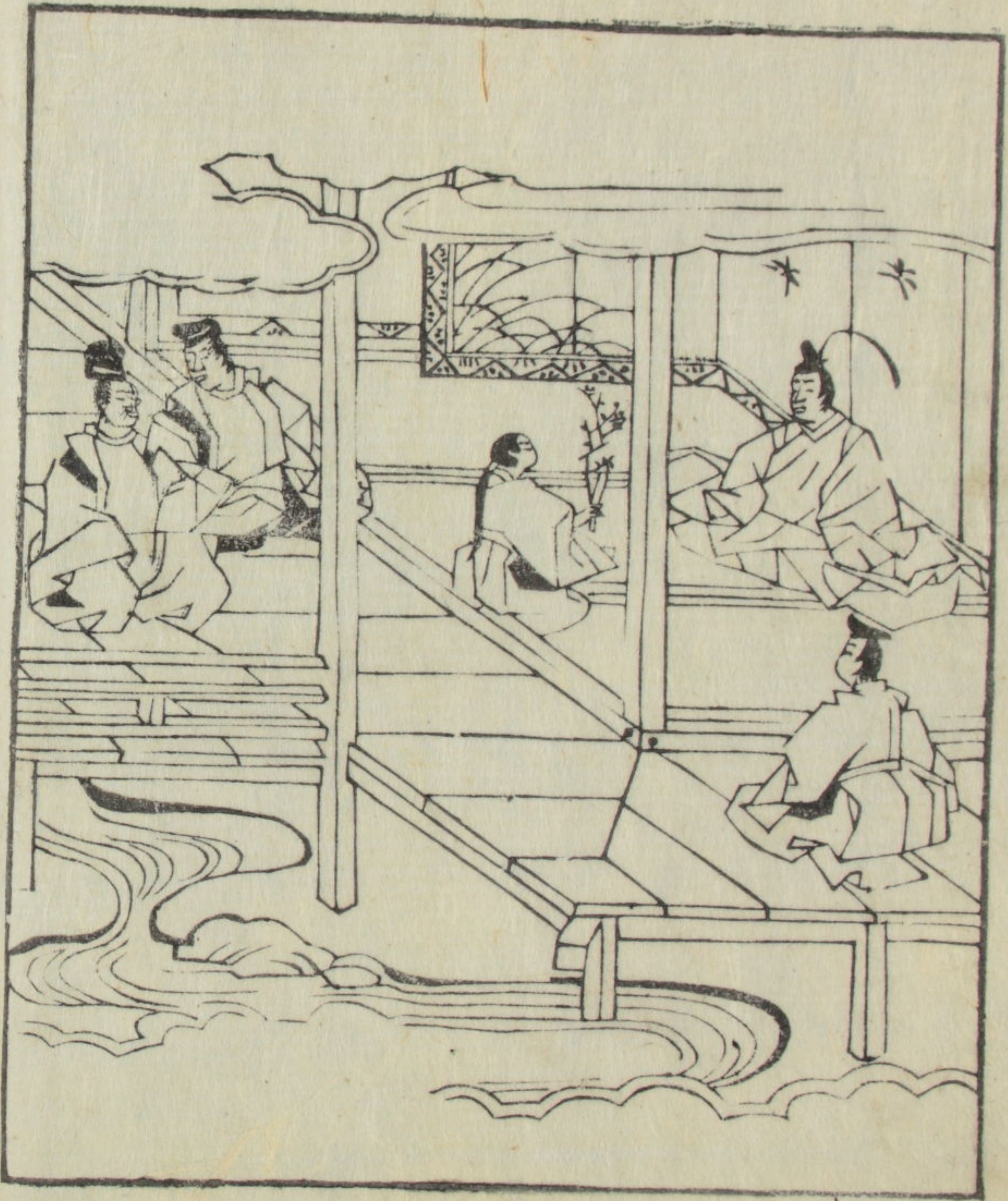
けいんをのまてい
人いふおのまてい

みま

のうらあつた
りうたふおのまてい
ひらたふおのまてい

大おのまてい
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた



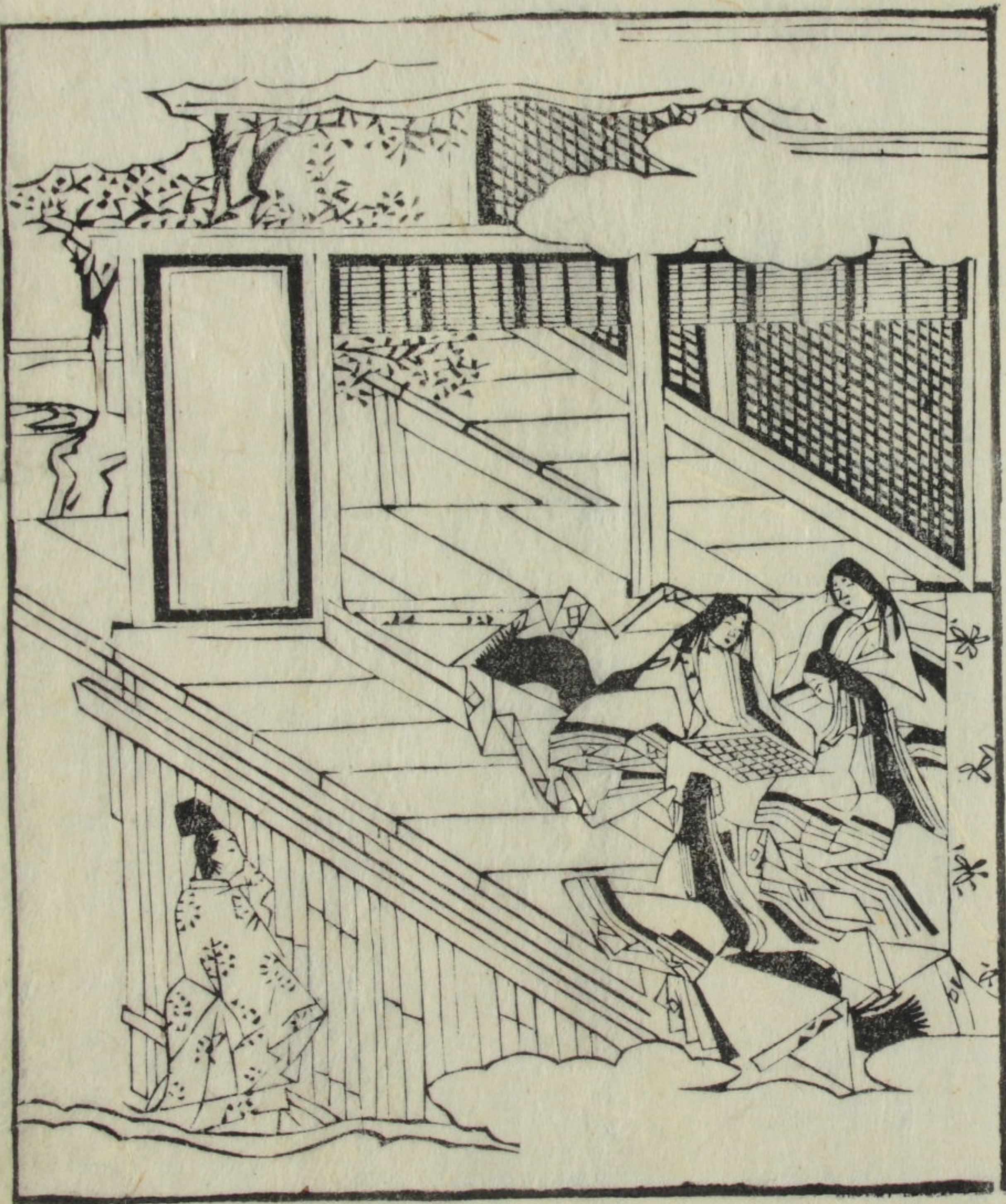
大御
 ものゝれあつるまゝに神つきて
 花もえさるゝあまやちゝさん
 ちのちあつるまゝにちあつて
 いふゝあつるまゝにちあつて
 大御まゝのまゝあつてまゝのまゝ

たけり

御うゝれあつるまゝに神つきて
 二人おつてあつるまゝにちあつて
 一人おつてあつるまゝにちあつて
 まゝにちあつるまゝにちあつて

ホのあまのつのは柄れ花さうらうらふらふ
しつあめがすまごころん中門はたさう
わらう花人のあめりしとく入るのてあめり
わんごころんさきしけうあおさきいさう
しあめり柄れ柄れ竹川さうあおさきいさう
ふらうらうせいつしあめりさう
人いそれ花さうらうらうらう
ひらうぞゆらうまの夜のや
せうらうらうあめり色さうらう物の人
さうらうらういさうらうらう
あさひらうらう花柄れ花のきん

竹月乃らうらうらうらう
あさひらうのさきいさうらう
さけ川いさうらうらうらう
いさうらうらうらうらう
あさひらう花さうらうらう
いさう人のあめり花のゆらうらう
のさうらうのぞく花
はらうらうらうらうらうらう
あさひらうらうらうらう
あさひらうらうらうらう
あさひらうらうらうらう



雲
 まつるがけのうらなひの
 けあらる事いよのての
 うけうよをたふしきん
 けあつて池乃千がらふ
 あらとをうしむわが
 ちぞれけりちねと
 よのうのしを
 けくろくよのい
 けりてうれ神いあ
 右
 本
 本
 本

かおのいあひのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
あまをうらふ中ねをまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

かおらうらうら中ねのまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

かお

かおをまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

かおに隠れまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あまをまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに



其のい草のまきかろるがみく
のみろる物ありあはたしうらぬれ
おしりまらるあがえまーや
しりこぬのまのいかにあのあ
らりこるまはるまのあ

